

Carrel interview

キャレルインタビュー

僧侶

祖淵春龍さん

静かなたたずまいと穏やかな笑顔、流ちょうな日本語が相まって、法衣姿に違和感はないものの祖淵春龍さんはアメリカ中西部の牧場で生まれ育ったアメリカ人。本名はガーヴィー・コリンさん。今は、長岡市蓬平町の曹洞宗・慶覚寺で僧侶を務める傍ら、アメリカのスタンフォード大学に籍を置き、AIについての研究も続けている。外国人×僧侶、さらに、曹洞宗×最先端技術という、異なる顔、異なる視点を持つ春龍さんのこれまでの道のりと、今、目指していることについて話を伺った。

text: 福原敦子 photo: ゆあさあきら

profile

そえん・しゅんりゅう／ガーヴィー・コリン●1984年、アメリカ・インディアナ州生まれ。ヴァッサー大学で日本語と日本文学を学んだ後、2008年来日。三条市で外国語指導助手（ALT）として勤務する中で、三条市・西明寺で禅宗に出会い、2012年7月に得度。アメリカに戻り、レンセラー工科大学でAIについて学び、博士課程を修了。その後はスタンフォード大学に研究職として籍を置きながら、2020年10月に再来日。専門僧堂・大栄寺で修行を積み、翌年7月に西明寺の末寺である長岡市・慶覚寺に赴任。坐禅道場としての認可を取得し、月2回坐禅会を開催。地域の人々に開かれた、癒やしの場としての寺を目指す。旧月潟村出身の妻と二人暮らし。

”
どんどん変わっていく社会にこそ
人に寄り添う仏教が必要なのではないかと思っています。
“



—長岡市の慶覚寺で住職を務めてどれくらいになりますか。

春龍 赴任したのは、2021年の7月です。でも、まだ住職じゃない(笑)。何といえはいいか、そう、住職見習いです。ここは長い歴史のある寺なのですが、数年間、誰も住んでいない状態が続いていました。私が修行した三条市の西明寺の末寺であることから、私がつかわされたのです。

—西明寺は曹洞宗のお寺。そもそもなぜ僧侶になろうと。

春龍 それは少し長い話になります。私はアメリカ中西部の牧場で生まれ育ちました。ニューヨーク州の大学に進み、日本語と日本文化を学んで、卒業後に日本にきました。三条市の小学校、中学校で外国語指導助手（ALT）として英語を教えたのですが、最初は子どもたちと会話ができず、ショックでした。彼らは早口だし、言葉を省略して話すし、方言やスラング、ギャグなど分からないことばかり。そうして2年が過ぎて日本に慣れてきたころ、『なぜ私は家族や友人と離れて日本にいるのだろう』『何をしているのだろう』という疑問が生まれてきました。心のモヤモヤをどうやって消したらいいか、それには運動もお酒も役に立ちませんでした。

ピンチでした。

—そこで、お寺に。

春龍 こういう時はメデイテーション、つまり「瞑想」が大事と分かっていましたが、自分ひとりで行うのは私には難しかった。そういうことができる場所や、一緒にしてくれる人はいないかと探して、西明寺を見つけました。そして、土曜の夕方と平日の早朝に開かれていた坐禅会に参加したのです。—坐禅で何か変わりましたか。

春龍 丸いクッションの上に座って静かにしていると、モヤモヤを頭だけでなく、体全体で受け止められるようになり、心の波が落ち着いてきました。その安堵感を一緒に坐禅をした人たちとシェアできるのもよかったです。そして、住職の道春さんに出会えました。私にとつての禅マスター、師匠です！

—「禅」に触れて、どう感じましたか。

春龍 両親はキリスト教を信仰していましたが、私は天国にいる、『見えない神様』を信じることができなくて、それまで宗教を持っていませんでした。でも、坐禅会に2年間通い、道春さんの話を聞いていくうちに、目の前にいる道春さんが、仏教を開いたお釈迦様の代わりのように感じられてきた